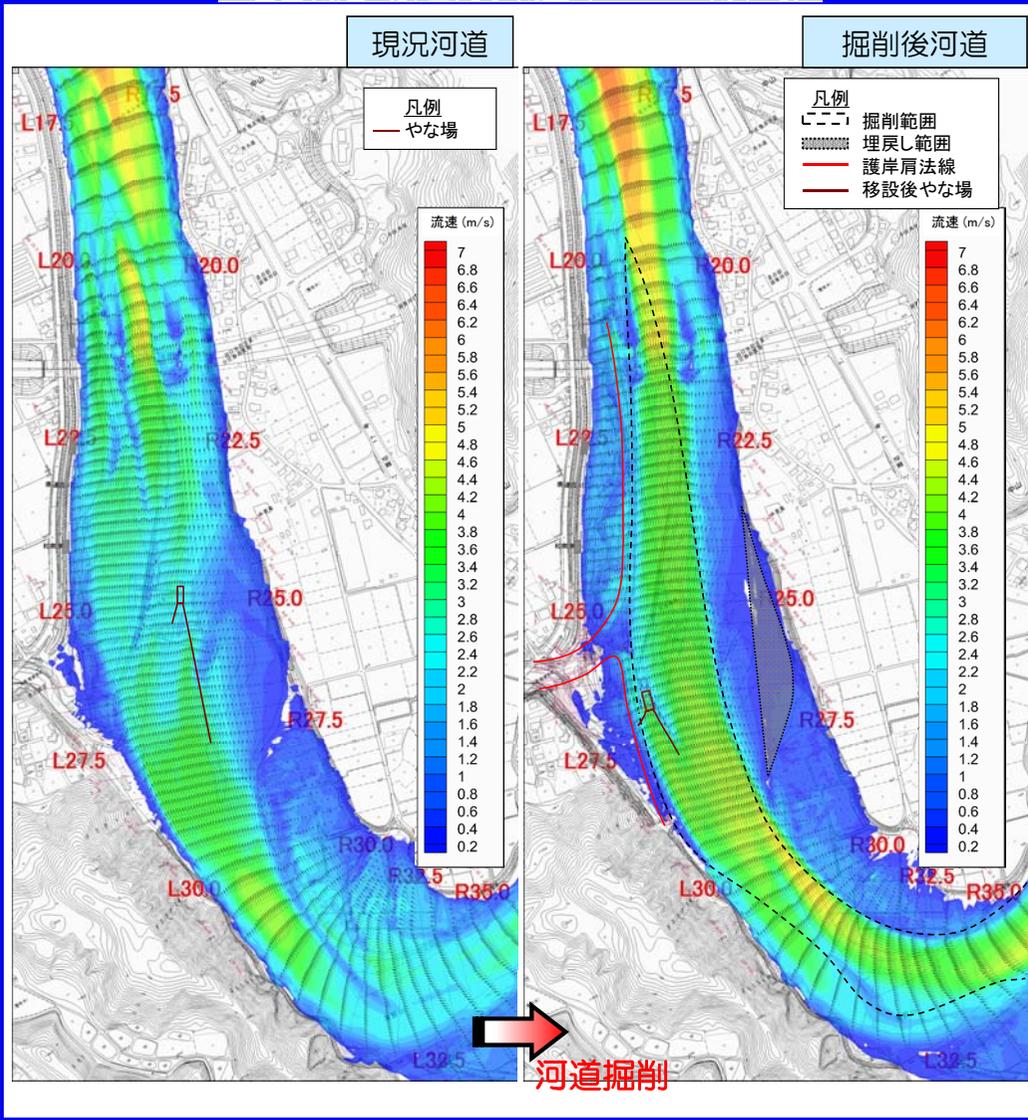
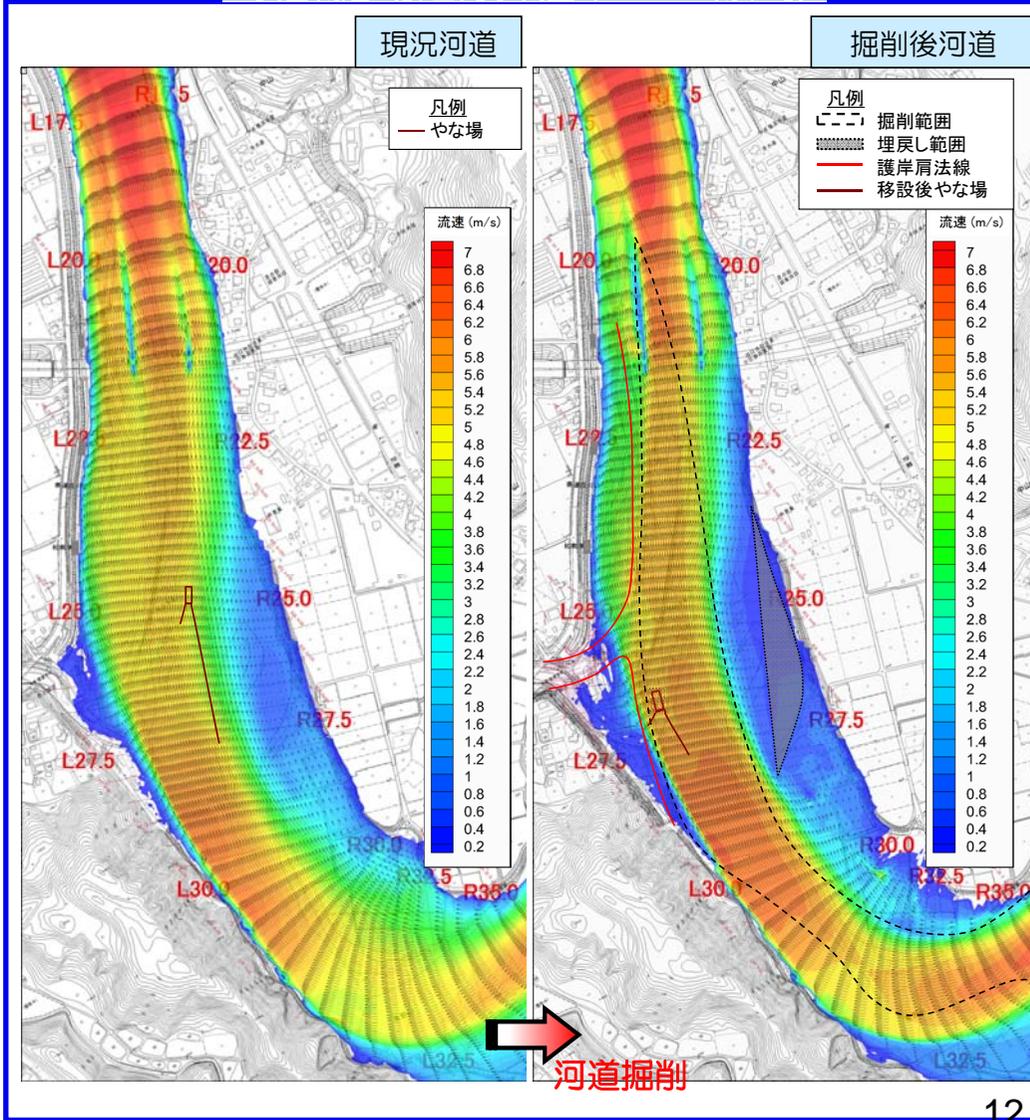


- ▶ 計画高水流量（概ね5,000m³/s）流下時の流速ベクトル・コンター図を以下に示す。（現況河道、掘削後河道それぞれの底面流速と表面流速を整理）
- ▶ 現況河道と掘削後河道のシミュレーション結果を比較すると、河道掘削によって洪水時の流況が現況より悪化する傾向（低水路掘削範囲とその近傍での局所的な渦流や死水域の形成など）は生じないことが確認された。
- ▶ やな場移設予定地周辺においても、周囲に比べ特異な流況（顕著な高流速や死水環境の形成）が発生することは無く、やな場移設による洪水時流況への悪影響は生じないと考えられる。

■底面流速（計画高水流量5,000m³/s流下時）

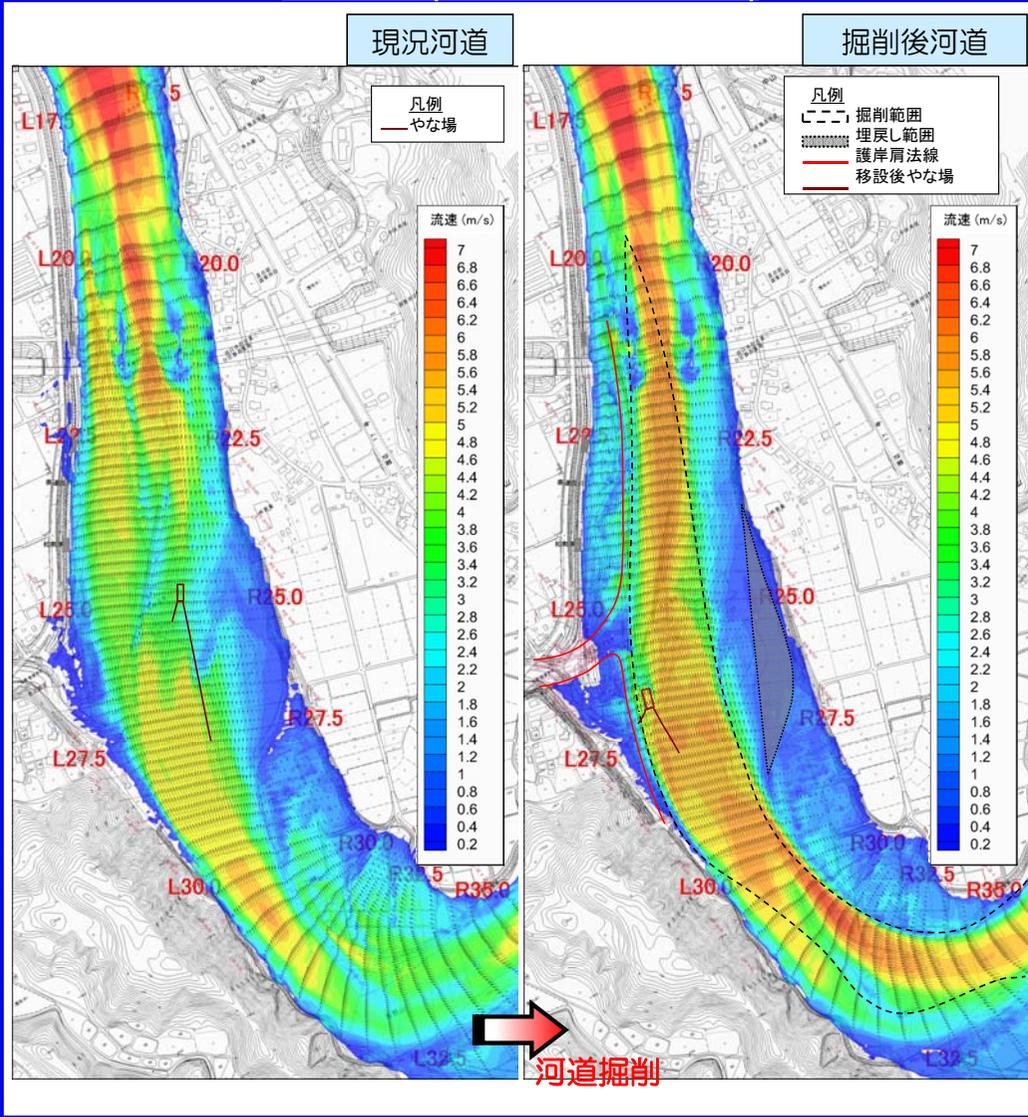


■表面流速（計画高水流量5,000m³/s流下時）

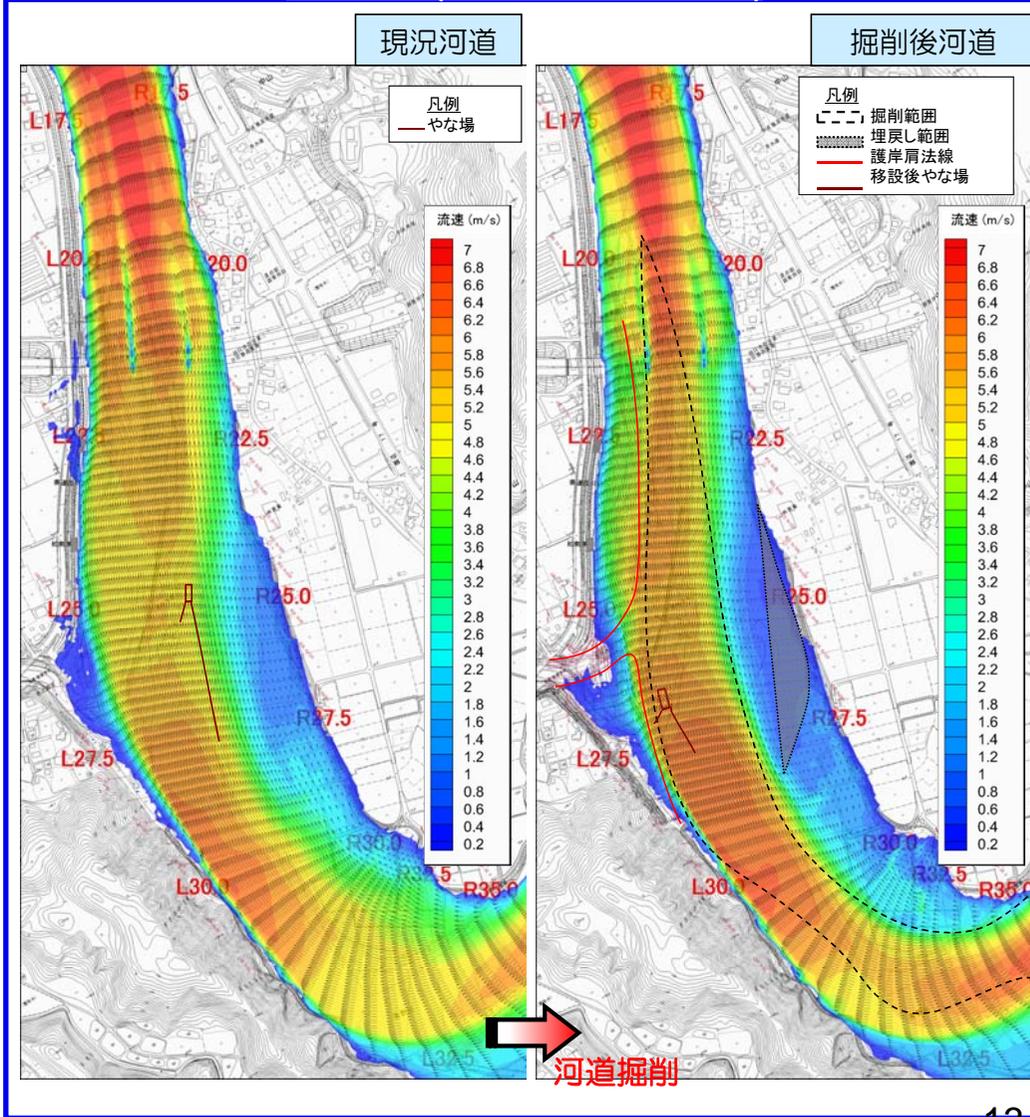


- ▶ 同様に、平成23年7月洪水ピーク流量（概ね5,400m³/s）流下時の流速ベクトル・コンター図を以下に示す。（現況河道、掘削後河道それぞれの底面流速と表面流速を整理）
- ▶ 計画高水流量流下時と同様、現況河道と掘削後河道のシミュレーション結果を比較すると、河道掘削によって洪水時の流況が現況河道により悪化する傾向（低水路掘削範囲とその近傍での局所的な渦流や死水域の形成など）は生じないことが確認された。
- ▶ やな場移設予定地周辺においても、周囲に比べ特異な流況（顕著な高流速や死水環境の形成）が発生することは無く、やな場移設による洪水時への悪影響は生じないと考えられる。

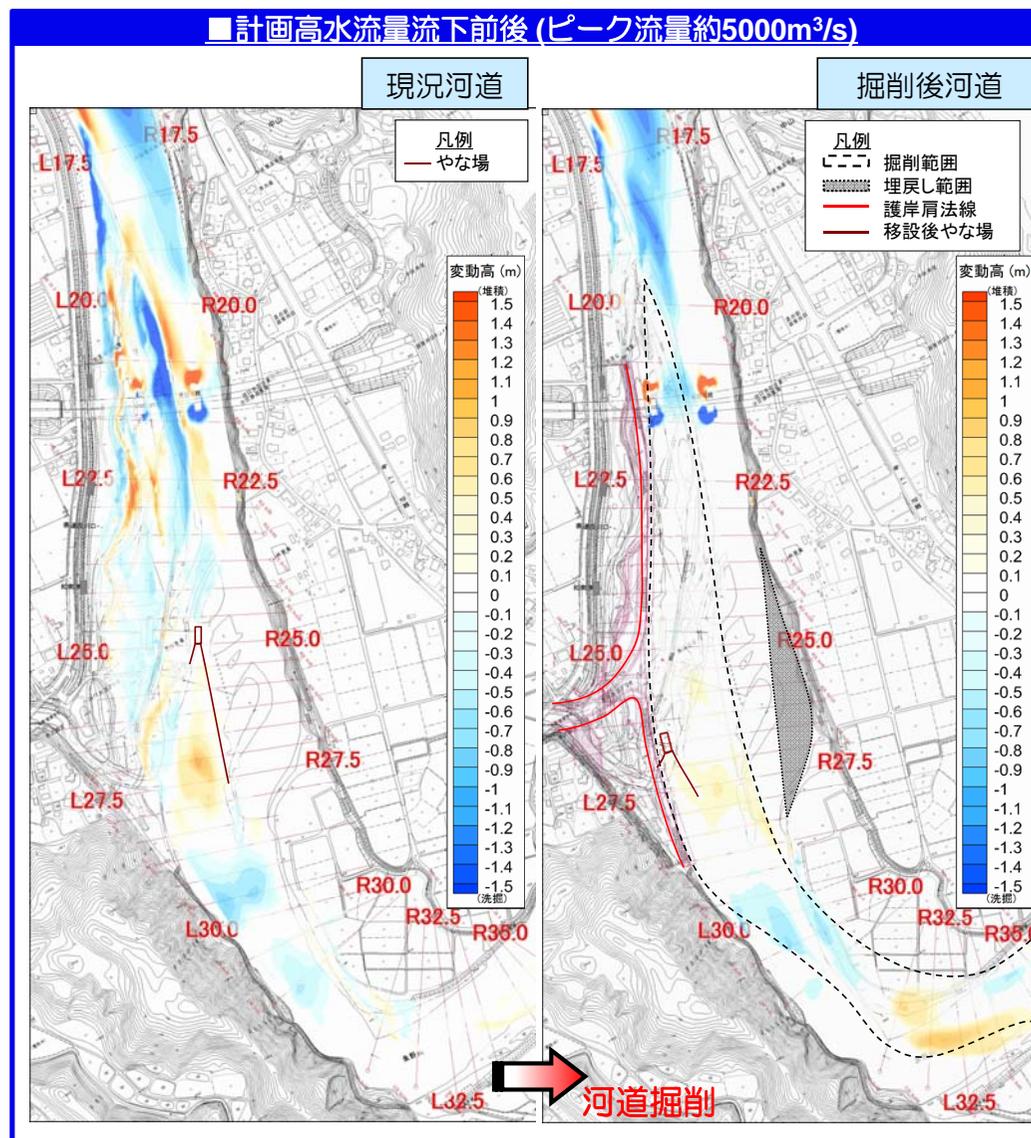
■底面流速(ピーク流量約5,400m³/s)



■表面流速(ピーク流量約5,400m³/s)

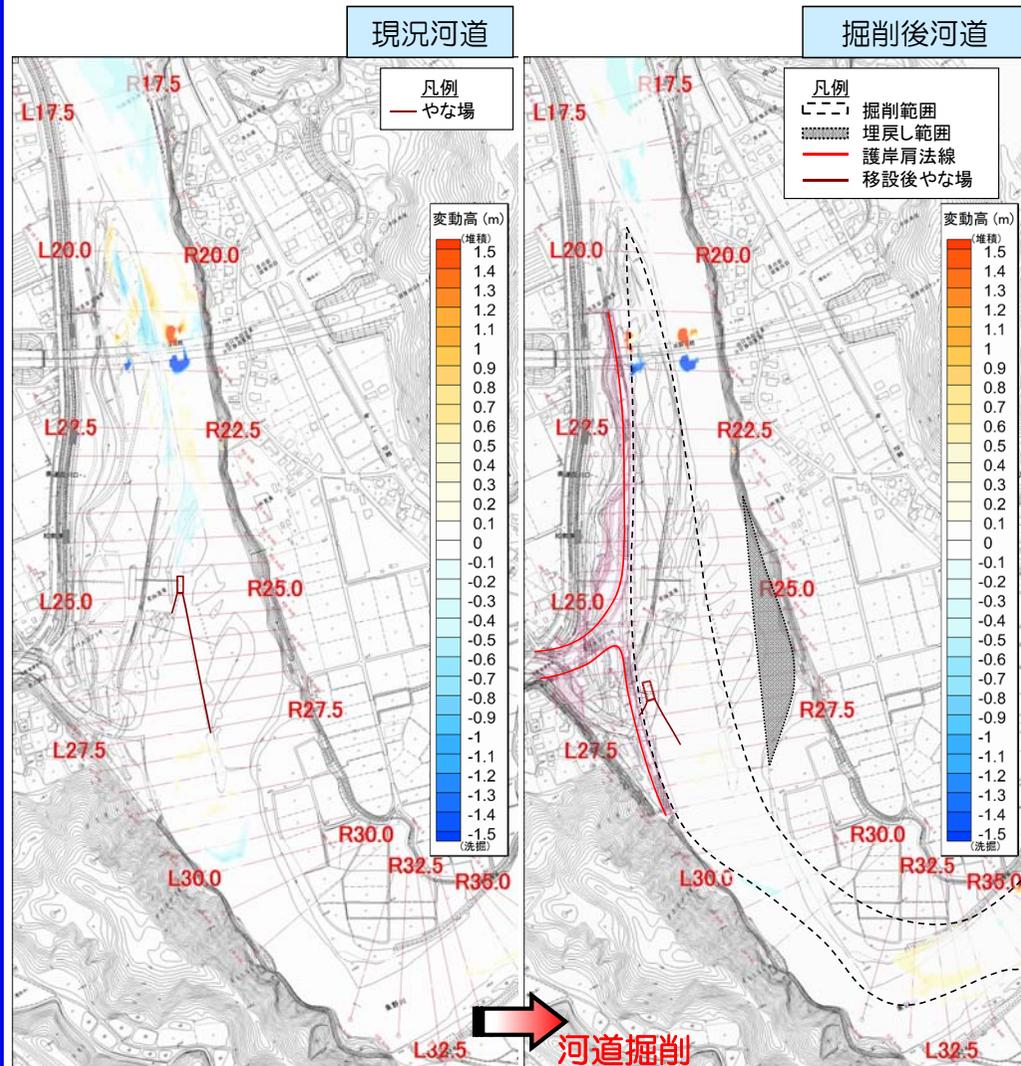


- 現況河道、掘削後河道それぞれにおける計画高水流量流下後の計算河床高差分コンター図を以下に示す。
- 現況河道においては、2.75k下流付近で土砂の堆積や、2.0~2.25k左岸付近の河岸の洗掘の傾向が確認されたが、掘削後河道ではこれらの河床変動量が小さくなり、比較的安定傾向になると考えられる。

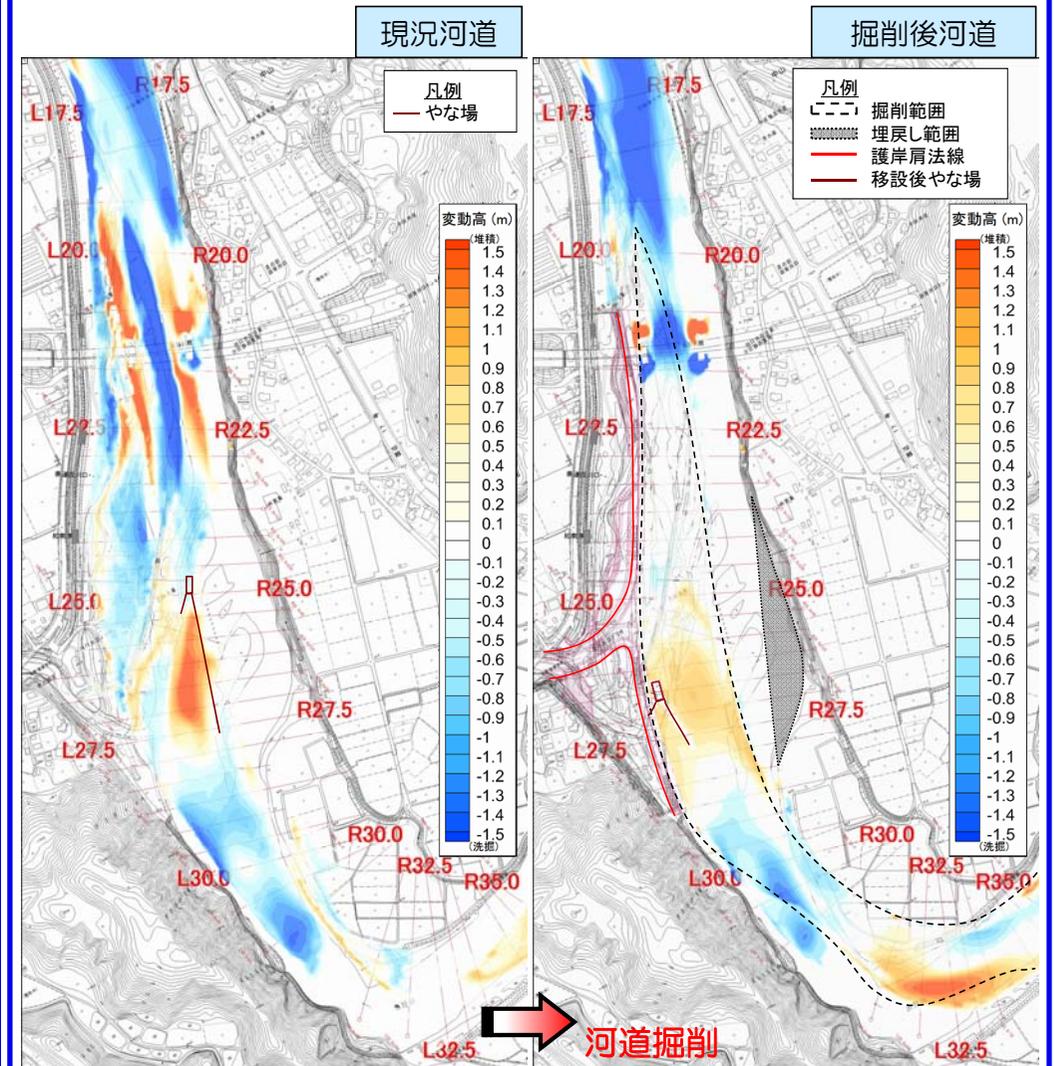


- 前頁と同様に、平均年最大流量流下後、平成23年7月実績洪水流下後の計算河床高差分コンター図を以下に示す。
- 現況河道・掘削後河道ともに、平均年最大流量規模では、全川の的に河床変動量は小さい。
- 平成23年7月洪水は、洪水の継続時間が長いので、計画高水流量流下前後と比べて河床変動量は大きくなる。
特に、現況河道では2.75k下流付近において顕著な土砂堆積傾向となっているが、掘削後河道では、この地点の堆積量は小さくなる。

■平均年最大流量(ピーク流量約1500m³/s)



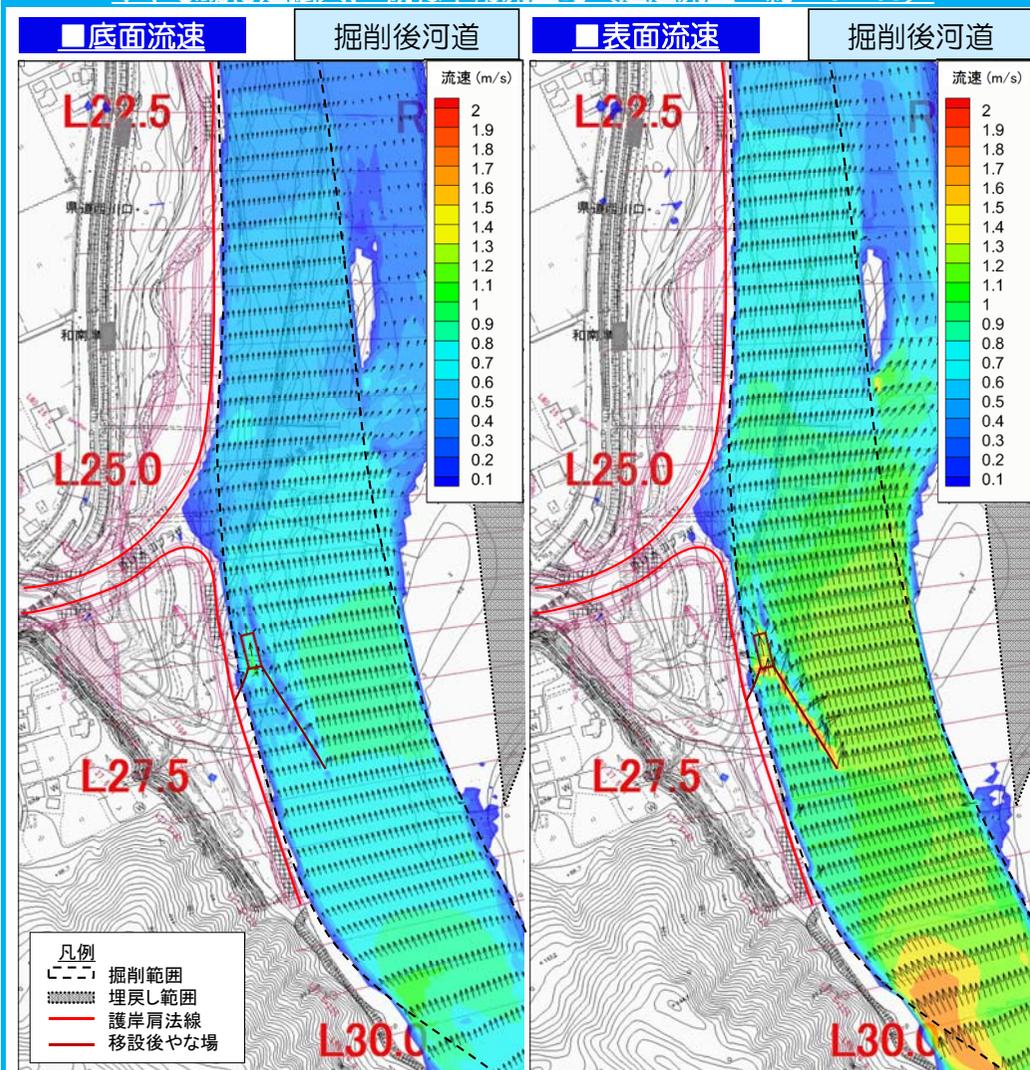
■H23.7洪水実績流量(ピーク流量約5,400m³/s)



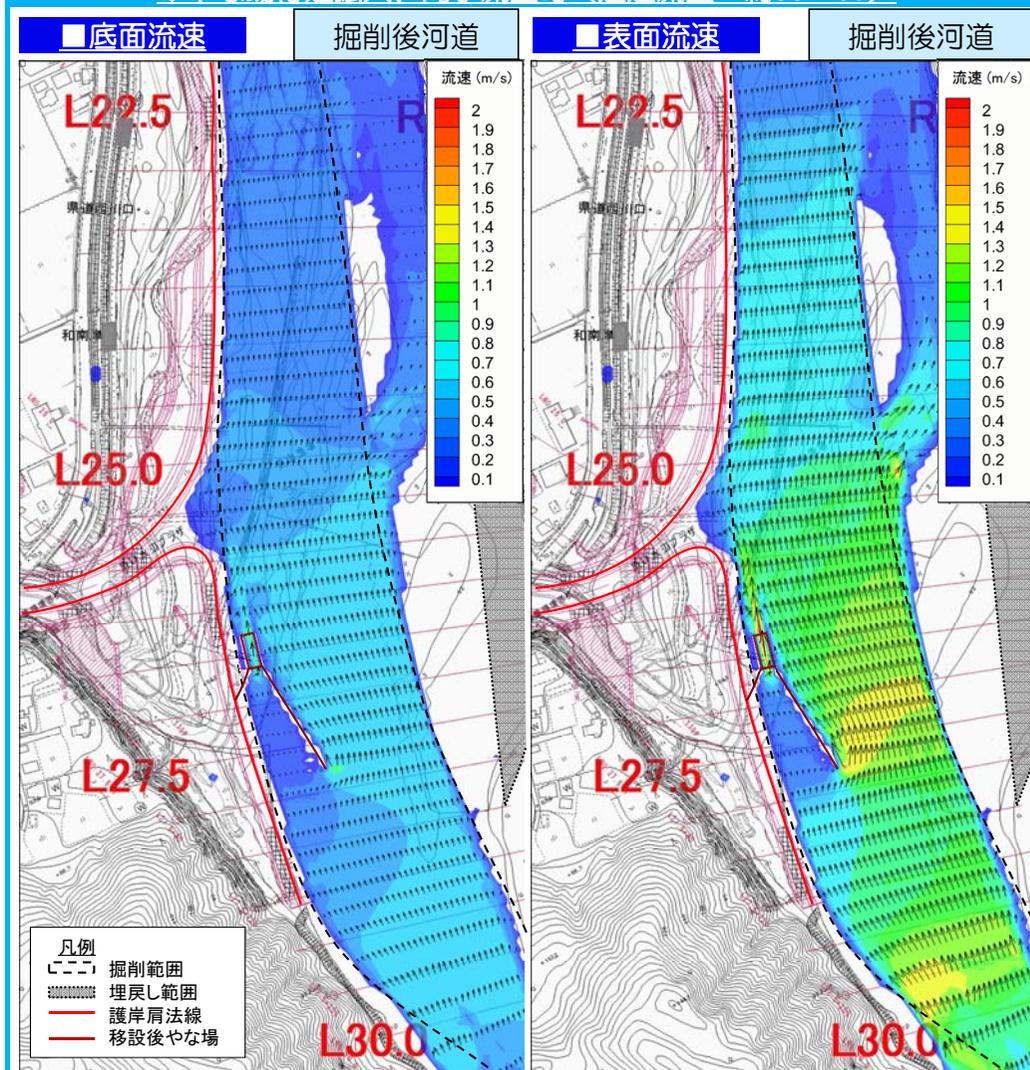
※平均年最大流量は、ピーク流量が10時間連続する定常状態を仮定したシミュレーションを実施

- ▶ 洪水時と同様に、平常時（約120m³/s）、濁水時（約50m³/s）を想定した予測シミュレーションについても実施した。
- ▶ 予測シミュレーションによって得られた掘削後河道の平常時および濁水時の流速ベクトルコンター図を以下に示す。
- ▶ 平常時、底面・表面ともに上流からやな場施設に向かう流れが確認され、濁水時においても、やな場施設付近は底面・表面とともに流速は小さくなるが、水が枯渇することはないという結果となった。

◆やな場付近拡大、概ね平常流量時（通過流量：約120m³/s）



◆やな場付近拡大、濁水流量時（通過流量：約50m³/s）



- 相川川合流に伴う魚野川の洪水時流況への影響を確認するために相川川合流の有無に関する感度分析を準三次元不定流解析により実施した。対象流量は計画高水流量とし、相川川からの計画流量240m³/sが、魚野川本川のピーク（5,000m³/s）と同時生起するものと仮定した。
- 掘削後河道に対する計画高水流量流下時シミュレーション結果の流速コンター・ベクトル図（平均流速）と主流部の流速差分コンター図を以下に示す。
- 流速差分図より、仮に相川川からの合流が魚野川ピークと同時生起した場合は、魚野川本川の低水路（主流部）の流れに対する相川川合流の影響は小さいことが確認された。

◆計画高水流量5,000m³/s流下時（掘削後河道）

